

柴田宗宏先生



高校第 32 回 新井正博

柴田先生は当時まだ現役ばかりのプレーヤーであり、浦高選手時代のユース代表の話や、東京教育大学時代の戦績の話、そして何よりもあの読売サッカークラブの育ての親ということで伝説にするにはあまりにも若すぎたのであろうが、当時の部員は柴田先生を憧れの的としてみておりよくその指導に従った。練習内容も高度で厳しく何時の頃からか、「鬼」と呼ばれていた。さらに、試合の場面において常に相手の力を計算し、勝つための最善の指示がなされていた。事実、先生が転勤された先のチームがあつという間に県内屈指のチームになったことが、先生の指導力の高さと正しさを物語っている。

柴田先生のエピソードについては、

先生赴任直後の OB は「あの頃の面影はない・・・」という一言であった。さらに、入学よりすでに先輩たちが柴田先生を「鬼」と呼んでいた世代のメンバーたちは、何よりも先生の車にびっくりさせられたと語っている。「スカイライン」と言う名前の車はあの形ではないと多くの者が話し、あのボディカラーの車は「外車だ」等と言い出すものが出たほどであった。たしかに校舎の 2 階から見た車体の色と、下に降りて横から見た色では違っていたし、在学時代に 1 回だけ見た洗車の後の色もそれまでの色とは全く違って見えた。また、「範囲」「要素」という言葉が一つの話の中に随所に現れ、時として話が理解できなることがあった。(現在埼玉県内の実力ある中年サッカー指導者がこの「範囲」「要素」なる言葉を多用しているが、これはきっと柴田先生の流行らせたものに違いない。)

浦和高校サッカー部の代々の名監督の中でも、これほどカリスマ性と指導力の高い先生に指導を受けたことが我々の誇りである。